

第1回報告書 | 竹谷多賀子

日本とスコットランドを結ぶ創造の道

— 『TOWA MURA』 共同制作の軌跡 —

Takako Takeya

Jst



ショーイング(クリエイションの成果発表) © Ian Biggar

プロジェクトの背景：
滅びゆく村々から生まれた物語

芸術監督・演出家中島諒人率いる「鳥の劇場」(鳥取市)と、スコットランド側の共同制作者であり、詩人トム・ポウと音楽グループ「ガロウェイアグリーメント」(ダンフリーズ・アンド・ガロウェイ州)による協働は、偶然の出会いから生まれた必然の物語である。

協働の源流は2007年に遡る。トムはスコットランドの文化助成機関であるクリエイティブ・スコットランドの支援を受け、欧州各地の「消えゆく村々」を訪ね歩き、出会った人々の声・風景・音を詩・物語・写真集・サウンド・アルバムへと編み上げた。そこに刻まれたのは、衰退と再生が同居する生活の現実である。同時期には、トムとガロウェイアグリーメントによる言葉と音楽のプロジェクト「Nine Nests」が進められ、その創作経験がやがて舞台作品『村と道(The Village and The Road)』として結実した。2022年には、同作がエジンバラ・フリンジの“Made in Scotland”ショーケースに選出され、高い評価を得る。その作品を見出したのが、『TOWA MURA』の日本側プロデューサー・西尾祥子(arts knot)

である。彼女の紹介と中島の決断によって、鳥の劇場が主催する国際演劇祭「鳥の演劇祭」への招聘が実現し、この出会いが日英共同制作の出発点となった。

両者を結びつけた最初の共通点は、「過疎」というテーマである。

『TOWA MURA』の創作拠点となった小劇場 CatStrand のクリエイティブ・ディレクターであり、本作の共同プロデューサーでもあるピーター・レンウィックは、次のように語っている。

「ニューガロウェイを中心とするグレンケン地域は、スコットランド南西部に位置する9つの小さな農村から構成されており、人口はおよそ3,000人です。自然環境に恵まれ、地域には強いコミュニティ精神が根づいています。しかしその一方で、農村部の貧困、交通の不便さ、老朽化した住宅、雇用機会の少なさといった課題が、過疎化を進行させる要因となっています」。

このようなスコットランドの現状は、日本の地方にも通じるものがある。

中島は次のように述べる。

「私たちが活動する地域もまた人口減少に直面しており、トムの作品を通して強い共鳴を覚えました。」

日本の「村」を訪ねて： 鳥取でのフィールドワークと信頼の醸成

こうして、トムとガロウェイアグリーメントは、2023年に「鳥の演劇祭」に招聘されることとなった。

初来日時、トムは「日本の過疎の村でフィールドワークをしたい」と希望し、鳥の劇場の支援のもと、通訳・コーディネーターとともに鳥取県内のいくつかの村を訪れ、地域の人々と出会い、彼らの生活や記憶を丁寧に聞き取った。その1年目のリサーチは創作に深く影響を与え、翌年(2024年)には中島の提案により、『村と道』に日本の風景や記憶を取り込んだ新バージョンが上演された。さらに、鳥取でのフィールドワークの体験をもとに、詩集『GHOSTS AT PLAY: Poems from Rural Japan』(『遊ぶ亡霊たち—日本の村からの詩』、対訳・宮内奈緒)が刊行される。こうした継続的な交流を通じて、トムとガロウェイアグリーメント、鳥の劇場のあいだには信頼関係が築かれ、両地域が互いの「小さな歴史」を共有するようになっていった。そして中島の新たな提案により、この詩集も創作のインスピレーションに加えた新しい演劇作品の構想が生まれ、それが後に『TOWA MURA』の共同制作へとつながっていくこととなる。

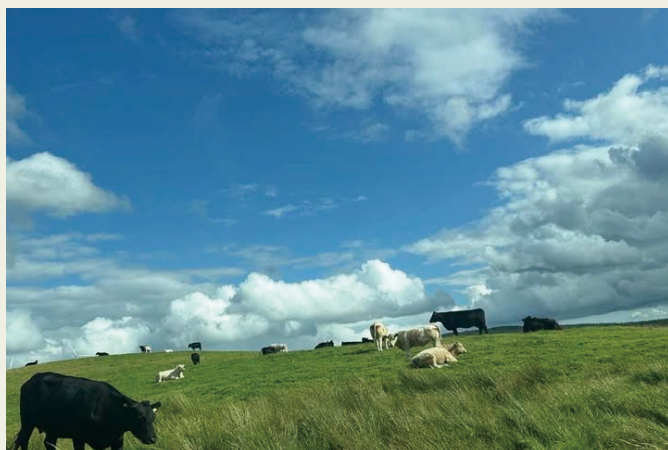
作品の着想には、トムが偶然見た日本のニュースが影響している。ひとつの村が埋立地整備のために移転を迫られ、「村を残すか、手放すか」をめぐり住民が議論するという報道であった。トムはそこに、ヨーロッパ各地で見られる“滅びゆく村”と共通する、人間の葛藤と選択の普遍的な構図を見出したのである。トムは「この作品は、ヨーロッパでの旅、日本でのリサーチ、そして鳥の劇場の支援がなければ決して生まれなかった」と述懐する。詩人としての感受性と創作者としての構築力が交差し、地域に根ざしながらも普遍的な物語が形づくられていった。

「滅び」と「回復力」:テーマに込めた思い

トムが追い続けてきたテーマは「過疎」である。しかしそれは、単なる衰退の物語ではない。「滅びゆく村で出会った人々は、むしろ強く、ユーモアを持ち、今を受け入れて生きる力を備えていた。」それは「回復力(Resilience)」の物語であり、失われゆくものの中にある人間の尊厳と希望を描く賛歌である。鳥取での取材でもその姿勢は貫かれた。村の人々の記憶や声が作品の随所に息づき、子ども時代の川遊びの記憶や、観客のアンケートで集めた「I remember (思い出す/忘れない)」の言葉が物語として再構成されている。作品に刻まれたエピソードの多くは、地域の記憶と詩人の想像力が交差する“ドキュメンタリーレベルのリアリティ”に基づいている。



過疎化が進むニューガロウェイの町並み(筆者撮影)



町の近郊には広大な牧場が広がる(筆者撮影)



クリエイションの舞台となったCatStrand 外観(筆者撮影)



CatStrand 館内の様子。

地域コミュニティの交流拠点として機能している(筆者撮影)

観客への問い、詩と演劇のあいだで

『TOWA MURA』の核心は「選択」である。村を残すのか、離れるのか——物語は決断の瞬間で幕を閉じ、答えは観客に委ねられる。トムはこの構造を「プレヒト★1的」と捉え、「作品の結末は観客の中にある。観たあとに何を語るかが、この作品の延長線上なのです」と語る。稽古時、中島が俳優たちに「もしあなたが村人なら、どう決断しますか」と問いかけた。この“未完の問い”が観客の思考を促し、対話の場を創り出している。

トムにとって詩は「内なる声を探す行為」であり、戯曲は「他者と対話する芸術」である。

「詩は瞬間的な創造であり、戯曲は構築の時間を要する。しかしどちらも情熱と発見の行為であり、言葉を通して世界を理解する点で共通している。」

詩の構造的思考を演劇の脚本作法に応用することで、彼の作品は独自のリズムと密度を獲得している。

創作プロセス:三つの言語と身体の対話

創作は、詩、音楽、身体表現が等価に交差する形式で進められた。俳優は詩の言葉を声と身体に移し替え、音楽家は台本を読み込み、情景や感情を音に変換する。すべての音楽はオリジナルであり、単なる伴奏ではなく「もうひとつの語り手」として機能する。言語は日本語・英語・音楽の三種類。リズムや息遣いを共有し、身体という共通言語で橋を架けていく。

中島は「互いを感じているのかを確かめ合い、全体の流れを共有しながら進めている」と語り、この共同制作における相互理解と共感の重要性を強調する。

俳優の安田菜耶は「言葉よりも身体で感じるものが多く、それが新たな発見につながっている」と述べ、スコットランドの俳優スティーヴン・マコールは「自分のセリフだけでなく、台本全体を把握することで相互理解が深まる」と明言する。また、中川玲奈は「互いの変化に敏感に反応し合い、信頼関係のもとで率直に意見を交わせる環境がある」と述べ、小菅紘史は「ジェスチャー

や身体表現の違いを通じて、表現の幅が広がった」と振り返る。

音楽チームのメンバーも、俳優との協働に強い手応えを感じている。

スチュアート・マクファーソン(コントラバス)は「ムーブメントがこの作品の重要な要素であり、俳優たちの表現力は素晴らしい。私たちの多くのキュー(合図)は彼らの動きがきっかけとなっている」と述べ、ウェンディ・スチュワート(ハープ・歌)も「俳優たちは音楽への合図を的確に意識しており、非常に順応性が高い」と語っている。

こうした相互作用の積み重ねが、『TOWA MURA』という作品に独自の生命力を与え、日英双方の芸術家による真の共創を実現させているのである。

プロデュースと現場運営の視点

プロデューサーの西尾は、国際共同制作における創作の質を高めるには、十分な時間と関係性の熟成が不可欠であると指摘する。「今回も、2023年の『村と道』招聘と鳥取でのリサーチ、さらに2024年の日本篇を加えた再招聘や詩集出版といった一連のプロセスを通じて、すでに強固な信頼と対等なパートナーシップが築かれていた。しかし、このような好条件が揃っていても、日本側が単年度助成のみを前提としている現状では、日英双方が助成を確保し、計画を同時に始動させることは容易ではなかった。例えばクリエイティブ・スコットランドは“創作”と“ツアー”を見据えた複数年助成を前提としている。そんななか、国際交流基金の舞台芸術国際共同制作事業において2か年計画で申請できたことが、今回の事業を具体化させる大きな契機となった」と述べている。

ガロウェイアグリーメントのメンバーであるルース・モリス(ニッケルハルパ★2)は、ピーターとともに『村と道』期から制作の中核を担ってきた共同プロデューサーである。作品は当初、詩の朗読に音楽を添える形で構想されていたが、演出家マシュー・ザヨンツの参加によって、演劇作品へと進化した。ルースは、「音楽は物語の



稽古初日のウェルカムパーティー©Ian Biggar



演出家の中島諒人と詩人・劇作家のトム・ボウ(筆者撮影)

背景ではなく、登場人物の“声”そのものだ」と語る。『TOWA MURA』では日本語のリズムや祭礼の掛け声といった日本的要素が取り入れられ、文化の重なりが音として響き合った。さらに、スコットランドの伝統的な“集い”を意味する Ceilidh(ケイリー)★3の精神が息づき、稽古初日から音楽と踊りの自然な交流が生まれた(左頁左下写真)。

ルースは、「日本チームの真摯さと感受性に強く刺激を受けた。これからも映像や音源を共有しながら、この関係をさらに深めていきたい」と語り、協働の継続に期待を寄せた。

第1回ショーイング(クリエイションの成果発表): スコットランドで生まれた手応え

2025年8月6日、CatStrandにて『TOWA MURA』のワーク・イン・プログレスのショーイングが実施された。8日間の合同稽古を経て迎えた本公演には約70名の観客が来場し(満席)、上演後のインタビューでは、文化的・社会的意義について多様な視点から意見が寄せられた。なかでも以下の視点が顕著だった。

○文化的交流の新鮮さ

「日本の演劇をニューガロウェイで観られたこと自体が貴重」「異なる背景の人々が、舞台上で“共通の体験”を共有していた」との声が多数。ある観客は「日常的に認識していた課題が、より大きな世界的問題として立ち現れた。ローカルからグローバルへ開かれていく過程を目撃した」と語った。

○地域課題への理解と共感の深化

「一つの視点では分かりにくい問題も、物語として出会うと“自分ごと”に転化する」「遠い地域の事象ではなく、自らの生活に連なる問題として理解できた」との感想が寄せられた。ドイツの小村出身の観客は「自分の村も同じ道を辿りつつある」と述べ、国境を越える共感が確認された。

○経済的豊かさと共同体の脆弱性

「村が消えるのは高齢化や人口流出だけではなく、経済的豊かさが人と人の結びつきを弱める側面もある」との指摘があった。豊かさゆえの孤立という逆説は、現代社会における“見えにくい過疎”への洞察であり、作品が投げかけた普遍的問いの深さを示す。

○記憶と自然へのまなざし

「冒頭の本木の演技が象徴的で、人間と自然の関係を考え直した」「I remember(思い出す/忘れない)」というキーワードが強く響いた」との意見が多い。ヒロシマやナガサキのような大きな記憶に限らず、日々の小さな記憶を繋ぐことが未来の道筋をつくるという洞察が共有された。

○音楽が“語る”舞台構造

「異なる文化や言語が見事に融合」「演奏家が自然に舞台の一部となり、音楽が“語り”として存在していた」と高評価が相次いだ。多くが日本語が分からない観客であったが「詩の世界を強く感じた」「感情の流れが音と身体で伝わった」との感想が得られ、言語を超える表現の力が裏付けられた。

これらの反応は、『TOWA MURA』が単なる舞台発表にとどまらず、観客一人ひとりが自らの生活や地域社会を見つめ直すための場として機能したことを示している。

未来へ—— 小さな村から生まれる大きな希望

鳥の劇場とCatStrandは、いずれも廃校を再生して生まれた地域の文化拠点であり、「小さなコミュニティにおける芸術の意味」を探求している点で共通している。

中島は次のように語る。

「都市の演劇が娯楽や商品であるのに対し、地域の演劇



クリエイション最終日の様子(arts knot提供)



ショーイング後のフィードバック©Ian Biggar

は“生きることを考える場”である。トムの力強い言葉とガロウェイアグリメントの音楽が融合することで、社会的テーマと美的表現が響き合い、作品としての厚みが増している。」

ピーターも次のように述べている。「『TOWA MURA』が描くのは、まさに地方コミュニティの本質なのです。なぜ人々はここに留まり、あるいは離れていくのか——それがこの作品の根底にある問いです。」

鳥の劇場とCatStrandはいずれも、人口減少地域に根ざして活動する劇場であり、地域社会における芸術の役割を模索し続けてきた。両者に共通するのは、地域に生きる人々の現実を見つめ、その中から新たな価値や希望を創造しようとする姿勢である。

さらに、中島は創作の根底にある思いを次のように述べる。

「“人を生かし続けるのは記憶だ”というトムの言葉に強く心を動かされましたが、同時に“記憶だけでよいのか”という問いも感じました。作品づくりを通して、私たちは“未来を語る力”を取り戻したいと思います。」

『TOWA MURA』は、過疎・記憶・選択という普遍的なテーマを通して、「いま、ここをどう生きるか」という問いを観客に投げかける作品である。そこには、地域に生きる人々が自らの物語を再発見し、他者と共有するための希望の光が宿っている。

今後、日英双方での上演やツアーが計画されており、鳥の劇場とCatStrandの間では姉妹提携の構想も進められている。こうした交流は、単なる文化事業の枠を超え、地域同士が互いに学び合い、支え合う新たな連帯のかたちを示している。

演劇を通じた地域間の連帯と創造の輪は、静かに芽吹き、確かな歩みでその広がりを見せている。

(2025年11月)



トム・ポウ氏宅のホームパーティーにて、一層関係性を深める(arts knot提供)



『TOWA MURA』の創作の原点となったトム・ポウ(対訳・宮内奈緒)による詩集(筆者撮影)

★1 ベルトルト・ブレヒト(Bertolt Brecht, 1898-1956): ドイツの劇作家・演出家・詩人。観客に批判的距離を保たせる「異化効果(Verfremdungseffekt)」を用いた叙事詩的演劇を提唱し、20世紀演劇に革新をもたらした。代表作に『三文オペラ』『肝っ玉おっ母とその子どもたち』などがある。

★2 ニッケルハルパ(nyckelharpa): スウェーデンを中心に伝承されてきた鍵盤付き弦楽器で、弓で演奏しながら鍵盤で音程を変える構造をもつ。柔らかく深い共鳴音が特徴で、北欧の伝統音楽のみならず、現代音楽や舞台芸術でも広く用いられている。

★3 Ceilidh(ケイリー): ゲール語で「集い」や「交流」を意味する語に由来し、ダンスや音楽を中心に人々がともに楽しむ伝統的な社会的集まりを指す。スコットランドやアイルランドで広く親しまれ、コミュニティの結束や文化的アイデンティティの共有を促す文化実践として位置づけられる。